

論文の内容の要旨

論文題目 死刑囚たちの「歴史」 『反抗的人間』のコンテキスト

氏 名 竹 内 修 一

アルベール・カミュが 1951 年に発表した『反抗的人間』は、ルイ 16 世から 20 世紀の革命家ブハーリンに至るまで、多くの死刑囚の名をあげて近代史を辿ろうとする書物である。マルクス主義への批判を孕んだこの書物は、周知のように、カミュとサルトルとの名高い論争を惹起し、フランス知識人層に於いてカミュが発言力を低下させてゆくきっかけとなった。そのためであろうか、カミュが残した作品のうちで、このエッセイに関する研究が遅れていることは否定できない。だが、著者カミュ自身は、『反抗的人間』こそ彼の「もっとも重要な書物」とであると明言していた。また自分の「経験」を下敷きとしてこの書物を書いたことを強調し、『反抗的人間』とは彼にとってひとつの「打ち明け話 confidence」であり、そこで分析されているのは、みずからが生きた「矛盾」なのだとかミュは語っていた。このような証言に導かれて、本論文に於いてわれわれは『反抗的人間』のうちに、どのようにカミュそのひとの「経験」を読みとることができるかを探る。

『反抗的人間』が殺人を主題とする書物である以上、われわれは、直接的にであれ、間接的にであれ、カミュが遭遇した「殺人」をとりあげることになる。だが、そうした作業に着手するまえに、殺人者にして死刑囚ムルソーを主人公とする小説『異邦人』を通して、カミュの文学的・思想的出発点は如何なるものであったかを明らかにする。

第I章「不条理とアンディフェランス」では、『シーシュポスの神話』に於ける「不条理な推論」の結論である「明晰な視力をもった無関心」と『異邦人』との関係を探ることによって、カミュの思想的・文学的出発点を明らかにする。この章で問題とする「無関心＝アンディフェランス *indifférence*」とは「差異の否定 *in-différence*」のことであり、これは心理的な水準ではなく、価値的な水準に位置付けられねばならない。たとえば、ムルソーの口癖「同じことだ」は、「愛」にせよ「友情」にせよ、異なった価値をもつはずの事柄を同じ水準に引き下ろす。われわれはこの「アンディフェランス」の思想史上の位置を確認したあと、それが『異邦人』に於いてどのように表明されているかを探る。そして、死刑宣告のあと、「恩赦（恩寵）」の可能性を斥け、均質な（無差異の）牢獄のなかにとどまることを決意する死刑囚ムルソーの姿こそ、カミュの「ゼロポイント」であることを示す。

第II章「不条理・殺人・レジスタンス」に於いては、ドイツ軍によるフランス占領下で『異邦人』を書き上げたあと、やがて対独レジスタンスに参加していったカミュの「経験」を『反抗的人間』のうちにどのように読むことができるか探る。第二次世界大戦中のカミュの魂の状態の貴重な記録として、『ドイツ人の友への手紙』が残されている。われわれは架空に想定された「ドイツ人」に宛てた四通の手紙を分析しながら、カミュは暗黙のうちに「不条理」の三部作へ参照を行いながら「敵」と戦う理由を模索していることを確認する。このことをふまえて『反抗的人間』を読めば、カミュそのひとの戦争中の経験が、このエッセイのなかにたしかに書き込まれてことを明らかにできる。まずヒトラーとムッソリーニの姿を、かつて『手紙』の宛名人であった「ドイツ人」の表象の延長線上に位置付けることができる。また「不条理」が要求する立場を乗り越えようとする『反抗的人間』序論のうちに、そして「ニーチェとニヒリズム」と題された章に於ける「ドイツ人」ニーチェに対する執拗な批判のなかに、カミュによる自己批判を読みとることができる。

第III章「正義と殺人」では、パリ解放のあと、『コンバ』紙編集長となったカミュと『フィガロ』紙に拠ったモーリヤックとのあいだで交わされた、対独協力者のエピュラシオン（肅正）をめぐる論争が『反抗的人間』にどのような影を投げかけているかを探る。1944年10月から翌年の1月にかけて行われたこの論争に於いて、カミュが「人間の正義」を掲げてコラボの迅速な処罰を主張し、一時的にはあれ、処刑さえ是認したのに対し、モーリヤックは「慈悲」を呼び掛け、肅正の行き過ぎ

に警鐘を鳴らした。のちにカミュは、公の場で、モーリヤックが正しかったと認めることになる。われわれの考えでは、『反抗的人間』の一応は客観的な体裁をとる歴史叙述のうちに、この論争の反響を見出すことができる。まず確認できるのは、フランス革命の若き革命家サン＝ジュスト像に、かつてエピュラシオンを正当化したカミュ自身の姿が反映していることである。さらにカミュは近代史を「正義と恩寵」の闘争として捉えるのだが、こうした歴史の見方もまた、キリスト教徒モーリヤックとの論争の経験から導き出されたものであることをわれわれは示す。

第IV章「未来と殺人」では、1947年にモーリス・メルロ＝ポンティが刊行した『ヒューマニズムとテロル』と『反抗的人間』の関係を問題とする。名高い革命家ブハーリンを被告としたモスクワ肅正裁判を、対独協力者のエピュラシオンの裁判と比べながら、「主観的潔白と客観的裏切のドラマ」として解読するメルロ＝ポンティのエッセイは、カミュに対して強い印象を与えたことを『手帖』の記述からうかがうことができるからである。われわれは、『反抗的人間』第三部「歴史的反抗」の「全体性と裁判」に於いて、カミュがメルロ＝ポンティによるブハーリン裁判の解釈に反駁していることを示す。そしてこの「全体性と裁判」が、「王殺し」以来カミュが辿る近代史の最終部に位置していることをふまえれば、『反抗的人間』の最終的な仮想敵がメルロ＝ポンティであることを理解できる。またカミュ自身は、コミュニストの被告たちが公開裁判に於いて示した態度の起源を、18世紀にまでさかのぼり、ジャン＝ジャック・ルソーの『社会契約論』とルソーの思想を政治の舞台に上げた革命家サン＝ジュストに見出していることを示す。